

2002 年度宇都宮大学公開講座 「コミュニティー入門」

コミュニティーの核 家庭の再生と近隣の再構築

阿 部 靖

まえがき

「地域のことは地域で」とまちづくり討議のなかでよくいわれている。近隣の良好な関係を保ちながら、地域自治のために地域が自立し、互助、共助して、コミュニティーを確立すべきなのだが、困難な現実がある。コミュニティーの最小単位で核ともいべき家庭が日日、円満で、豊かなくらしを過ごせることが理想として、一方で何かの問題を抱える家庭は増えており、その問題や原因は複雑、多岐に拡がりをみせている。このような社会情勢の変化の深層はどこにあるのだろうか。

1. 問題を抱える家庭が増えている。

昨今の一部の家庭では、内には虐待（児童、高齢者）、DV、家庭内暴力、不和、離婚、未婚率の増加。外には不登校、いじめ、学級崩壊、非行、ひきこもり、社会、経済的問題で障害、介護、蒸発、ホームレス、自殺、などの問題を抱えており、家庭の危機、崩壊ともいわれている。

たとえば不登校について、宇都宮市学校教育課の説明によると、年間 30 日以上の欠席児童数は次のとおり。

	13 年度	在校生	率	12 年度
小学生	110	25,063	0.4%	98
中学生	491	13,219	3.7%	473

とくに中学校で目だって増えている。市では教育研究所が主体となり、適応指導教室の設置（市内 2ヶ所と小、中各一校）をはじめ、相談員や、カウンセラー（臨床心理士など）を配置し不登校などの不安定な児童に対処している他、教員に対しても研修アドバイスを実施している。県では民間レベルの親の会、フリースクールなどの教育ネットワーク組織があり、サンカルチャークラブ（宇都宮市、代表 山形正己氏）がその一つであるが、父兄を含めた当事者の相談相手ともなり、受け皿の役割を果たしている。問題解決は簡単ではないが、児童の回復にむけて公、民の連携が望まれる。

2. 県臨床心理士会の設立 10 周年記念「栃木こころの会議」（11 月 17 日 / 県教育会館）

「家族」をテーマに 800 名が参加し、熱心に耳を傾けた。講演「家族のゆくえ」で文化庁長官の河合隼雄日本臨床心理士会会長が「物が豊かになり、便利になった反面、便利さに走ってしまってこころを育てることを忘れている。頭を使うと同様にこころをもっと使

うべきで、現代は人間関係をなくす方向にすすんでいる」と指摘した。シンポ「家族が危ない」では、いずれも女性の3人のシンポジストが、保育園長、こどもの精神科の病院勤務、大学陶芸教室助教授がそれぞれの立場で現状認識をのべ、方向として家族自身の自己実現や自己責任で解決すべきだという論旨であったが、家族が危ない背景や要因はもっと深いところにあり、なにができるのか、これからどうしていけばよいのか掘り下げが不足と感じた。指定討論者として加わっていた児童相談所長が社会の責任に触れていたが、もはや家族だけで解決できる状態を超えている部分があり、社会全体で取り組み現状を理解し、支えあう仕組みづくりが必要になってきていると思う。

3. 家庭を襲う生活環境

戦後、物質面で豊かになったが、こころの精神面は貧しくなったといわれている。加えてバブル崩壊後の失われた10年がいまだに迷走を続け、日本の方向性を見出せない状態のなかで一段と社会問題が増えてきた。自殺やホームレスの増加がそれを表している端的な一例である。人々は今、財政、経済、年金の危機から将来に対して、身近には雇用や過労死に不安を感じている。

今、社会ではグローバル規模での熾烈な効率化競争、優勝劣敗の市場競争が行われ、この市場競争原理が、職場や仲間、人間関係までも浸透してきている。なにかという個人にまで勝ち負けのレッテルを貼る傾向があるが、すべての人が勝ち組みとはならないのが社会である。競争社会、学歴社会という冷酷な差別の社会が現存することが、家庭に影響を与えないはずはなく、家庭の危機への大きな要因になっているのではないか。

自由競争そのものを否定するわけではないが、過度の競争が人間の精神を歪めている。『自分さえよければ、他人はどうでもよい』という利己的個人主義の風潮が、道徳やモラルを後退させ、心ないまたは理由のない非行、犯罪をも多発させている。片方ですぐキレル、一方で無気力を生んでいるのはどうしたことだろう。

強者や勝者の「努力すれば報われる社会」の理論に騙されてはいけない。競争できない社会的弱者や、たとえば政、官、業の癒着や談合からはじき出され敗者がいる。競争に適正があるべきで、あるいは競争があっても、セーフティーネットは最低必要である。熟通いの子供たちが増えているが、塾に行ける子、経済的に許されない子、子供のころからすでに差別されているのが現実である。

4. コミュニティー（生活共同体）としての家庭のありかた

社会に問題があるとしても社会の一員である家庭が自立すべきは当然である。家庭にも新婚期、養育期、中年期、老年期とあり、それぞれ形態、課題の内容が変わってくるが、基本的に衣食住を共にする家庭には大きな価値と意義があるといえる。当然のこととして家族としての絆があつてしかるべきかと思う。

家庭の機能の一つは<食の場>である。共同で食べることで集団、帰属、仲間意識が

生まれ、食はコミュニティーの原点ともいえる。現実には時間差の食事で、孤食も多い。

二つめは<安らぎの場>である、人間の安心とは受容があることで、外で挫折があっても家庭に帰れば、最高で、絶好の話し相手がいて受容があり家庭は休息の場となる。しかし家族同士の対話時間が少なく、単なる同居人のような家族関係はホテル家族とも言われ、居場所さえないという現実もあるようだ。

三つめは<教育と学びの場>である。夫婦間はもちろん親子の関係ではいうまでもない。日常のくらしと対話のなかで、人間として生きることの大切を学ぶ。こどもは父親の背中をみて、母親の眼をみて育つ。コミュニケーションが必要で、認め合う、理解しあうことが求められるのだが、対話の少ない家庭、しつけさえ出来ない親が存在する。

四つめに<信頼の場>である。人間社会で最も大切な信頼を育むことができる。家族のメンバーが互いに、信じること、信じあえることを明確にしていきたい。価値観が拡がりすぎて、自分の相対的位置づけがわからないで不安な面もあるが、考える時間をつくり、責任を持って生きることにかけていたい。過去と現在と未来に確信をもって信じ、貫く姿勢を持とう。対話の場がなく、自身の考えがしっかり確立できていないため自己表現できない、通じ合わない、相対的に協調性に欠け、無関心が一番と問題を避けている自信のない家庭が少なからずあるようにうかがえる。

夢と希望をもって生きたいものだ。

5. 近隣の再構築

「近隣の苦情が12年前の5倍」は11月5日付け下野新聞の報道である。身近な環境に敏感になってきているのも事実だが、隣人の公害苦情が直接をさけて、行政に持ち込まれるのだが、近隣の希薄なつき合いを反映している。宇都宮市内での隣人を散弾銃で殺傷した事件(7月)は特異だとしても、本来、人間関係が良好であるべき近隣が、ここまでトラブルでこじれた背景は深刻である。これからも起こり得る可能性があるのだろうか。

社会は自分ひとりだけではなく、またひとりでは生きていけないのであり、いいかえれば人間は社会の中で生きており、生かされている。助け合い、支えあうことが当然なのである。同じように社会は自分の家庭だけでもないのだ。近隣社会と共に家庭はある。社会の構成員のひとりだということを自覚し、社会のルールとか、ものさしを理解し、判断して生活していかなければならない。

近隣同士が暮らしていく上でお互いに苦情を言い、言われたりすることはあってしかるべきだが、現代人はこれを苦手としている。要は見知らぬ人の関係にあるからであって、お互いに顔見知りになることに心がけたい。意外と難しいことことだけど、近隣なら知らない人にもまずあいさつや世間話からはじめようか。そして家庭に問題を抱えているのであれば秘密にすることもなく事情を知ってもらった方がよい。家庭での心配事

はむしろプライバシーは尊重しながらも、近隣のみんなで考えることが、これからの社会のありかたである。さらには問題解決のためのしかるべき自治会や民生委員、行政などの存在があり、相談窓口やボランティアの団体を活用していけばよい。もちろん家庭における問題や近隣の関係がすべて解決とは行かないにしても近隣の再構築へ前進するだろう。近隣こそ共同生活体すなわちコミュニティーなのである。よそものを受け入れたがらない村八分という悪習のなごりを捨てきりたい。